

説教「あなたをほめたたえさせ給え」

詩篇 119 篇 169～176 節 (口語訳聖書)

1974.2.3

日本バプテスト同盟 関東学院教会

信仰を告白し、バプテスマを受けて新たに教会に加わられた方に『信徒必携』をお渡ししておりますが、初めのところに「バプテスト信仰宣言」というのがあり、9カ条から成っています。その次に箇条ごとに同じ項目立てで解説がしてあるのですが、バプテスト主義の特徴としてそれらが書かれているわけです。

その第一に、こう書いてあります。「われらは、聖書を信仰と生活の基準とする」。そしてその解説のところで、「バプテスト教会は徹底した聖書主義に立つ教会です。すなわち、聖書以外の権威を認めない。この聖書主義は、聖書の至上性の主張です。そして、聖書の至上性とは聖書が神の言葉であるということに尽きる」と述べられています。つまり、聖書が神の言葉であるからこそ、信仰と生活の基準となるのです。聖書は私たち信徒の生活を規制するものであり、新生を与え、生活の指針として私たちを導いてくれるのであります。一言で言うならば、聖書の御言葉を私たちの生活の導き手として受け取る、これに従って歩むところにバプテストの特徴の第一のものがあると言えます。

詩篇119篇。これは一番長い詩篇ですが、御言葉を人生の喜びとし、指針とするということが一貫してうたわれています。そして、105節に「あなたのみ言葉はわが足のともしび、わが道の光です」とありますが、この言葉の中に聖書主義と言われていることが要約されているのを見るのであります。今朝は、御言葉を人生の指針とするということ、言葉のうえでのことだけでなく、自分のものとするために、二、三のことを御一緒に考えてみたいと思います。

「あなたのみ言葉はわが足のともしび、わが道の光です」とは、詩人の告白であり、神への信仰の表明です。ここで、これが御言葉を讃える賛美であるということに注目したいのです。詩篇 119 篇では「み言葉に従って」としばしば言われていますが、この御言葉を媒介として神と詩人との生命的な繋がりが言い表わされています。

とりわけ、175 節にある「わたしを生かして、あなたをほめたたえさせてください」という言葉、この言葉が私の注目を惹きました。文語訳では「願わくはわが靈魂をながらへしめたまへ。さらば汝をほめたへん」となっていますが、この言葉は「わたしを生かしてください。それは、あなた

をほめたたえるためであります」というように読めると思います。すなわち ここで、私が生きているということとあなたを賛美することとが深く関わっていることに注目しなければなりません。私が生きているということの最も深い意味は神を賛美するところにあると言ってよいのであります。これは、旧約の詩人が、御言葉を媒介として神をほめたたえることが人間としてなすべき第一にして根本的なことであることをうたった素晴らしい言葉だと思ふのです。

根本的だと申しましたのは、人は死んでしまつたら 神を讃えることができない、ということがしばしば言われているからです。詩篇 6 篇 5 節に、「死においては、あなたを覚えるものはなく、陰府においては、だれがあなたをほめたたえることができましょうか」とあります。また 30 篇 9 節には、「わたしが墓に下るならば、わたしの死になんの益があるでしょうか。ちりはあなたをほめたたえるでしょうか」とあります。さらに 88 篇、115 篇などにも同様な御言葉があり、イザヤ書 38 章 18～19 節には、「陰府は、あなたに感謝することはできない。ただ生ける者、生ける者のみ、きょう、わたしがするように、あなたに感謝する」とあります。こうして「死んでしまつては おしまいだ。つまらない」と そんな言葉を口にするのですが、詩人は、なぜおしまいであり、つまらないのかをもはっきりうたっております。「あなたをほめたたえることができないからである」と。「生きていてこそ、主をほめたたえることができる！」と。

このように、神を讃えるということが生きることに本質的なことであるとするならば、私たちはそのことをさらに突き詰めてみななければなりません。創世記 2 章 7 節に「神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹きいれられた。そこで 人は生きた者となった」とありますが、この「生きた者」という言葉と（詩篇 119 篇）175 節の「わたしを生かして、あなたをほめたたえさせてください」の「わたし」は同一のヘブライ語で、「魂」と訳される言葉が使われています。つまり、人が死ぬと、神の息が出てゆき、彼はちりに返るのであります。私たちは、神の息吹いぶきによって生きている存在です。また、造られた人間は神の像にかたち造られたともあります（創世記 1:27）。人が生きているのは実に この神に由来するのであり、人は この生命の源なる創造者に帰りゆくべき存在です。したがって、この神に向けて声を上げることが生きている人間の本質的な行為であるはずで、神を賛美するのは、神によって造られたものがなすべき本質的なことです。けれども、エデンの園で神の御言葉に聞き従っている間は 喜びと平安と賛美があつたのですが、しかし、御言葉そむに叛いてからは神から遠ざかってしまいました。神を賛美することはなくなつたのであります。バベルの塔を天に届かせようとする者に、賛美を見出すことはできませんでした。

賛美が消えたところでは人間の本当の生もまた失われるということは、以上のことから 当然の結果であると言えます。「一人の罪によって、死が入り込んできた」（ローマ 5:12）とパウロが言っていますが、死んだ者に賛美がないことは 詩人がうたつたとおりであります。歌も喜びもない人生。それは死んだものです。ですから、詩人は 107 節で、「主よ、み言葉に従つて、わたしを生か

してください」と祈っています。ここにおいて詩人は、神から離れたり叛き去った者たちに 神がその御言葉をもって救いの手を差し伸べておられることを知っているのです。そして、御言葉によってあなたを賛美しうるようにさせてください、と祈るのです。この御言葉は、神と人とを隔てる深淵しんえんを乗り越えさせる 神からの恵みの手段です。130 節に、「み言葉が開けると 光を放って、無学な者に知恵を与えます」とあります。御言葉が啓示される時、神から離れ神に叛いて 暗闇に神を見失った者に光が与えられ、啓示を悟ることができるようになると言っております。

私たちは、新約聖書において、この御言葉が 肉体をとって人となり給うたイエス・キリストにおいて与えられるのだということを知っています。イエス・キリストがそのすべてを投げ出し、罪の中に沈む人間を救い出してくださったのであります。私たちの叛き、偽り、不真実を癒やして、神の前に再び立つことができるようにしてくださいました。その恵みがどんなに大きく深いものか、また尊いものか。神の御子みこが御自分のすべてを賭して、死と滅びの中から私たちを贖あがない出してくださったことにより、私たちはそれを知るところとなりました。このイエス・キリストの救いの御業みわざと恵みを本当に信じる時、私たちは神に感謝することを知るのであります。言い換えれば、罪ということもまた罪によって死ぬということも知らず、したがって神というお方も知らない者にとっては、感謝ということも神を賛美するということもないであります。それは すなわち、大切な何か死んでいることと言えるのではないのでしょうか。

神に無関心である人でも、人間同士の間で感謝するということはたしかにあるでしょう。しかし、本当の感謝というのはどういうものでしょうか。バルトも言っておりますように、相手から何か親切をしてもらったことに対し、何らかの形でお返しすることでそれを帳消しにできるような感謝は本当の感謝ではないでしょう。本当の感謝というのは、受けた恩恵があまりに大きく、どんなにお返ししようと思っても もはや到底できない。返済したり、支払ったりし切れない。こういう恩恵こそ、本当に感謝に値するものと言えます。バルトはさらに続けて、「イエス・キリストを通して与えられた神の計り知れない恵みに対しては、感謝するほかない。このようにして、絶えず感謝し続けてゆくところに 真の人間の存在がある」と言っております。人間存在は、感謝する存在である。感謝のない愛は虚しい。神に対する最も敬虔けいけんな行為でさえ、感謝の業がないならば 無に等しいと、そう言っております。

ここに至り、神への感謝ということは、詩人の言う神への賛美と本質的には同じであると言ってよいのであります。詩人は、「わたしを生かして、あなたをほめたたえさせてください」（175）と祈っています。まさしく、私たちはイエス・キリストの恵みによって救われ、罪の虜とりこから解放され、生かされ、自由にされたがゆえに、本当に神を賛美することができるはずで、イエス・キリストにあって生かされているということは賛美することができるということであり、また、賛美できるのは生かされているからであります。

神に感謝し賛美することができる時、人は真に人間として生きていると言うことができるのだ、ということを知りました。そして、賛美によるこの神と人間との交わりを 聖書の御言葉が媒介してくれるとき、神の御言葉としての聖書は信仰と生活の基準として、権威をもってその人に臨むのです。聖書主義をバプテストの第一に挙げるべき良き伝統、良き特徴であるとするならば、この良き遺産を我がものとするため、何よりも御言葉によって神への感謝と賛美を学ばなければなりません。

私たちは日々の生活において、事あるごとに感謝をしているか、賛美が神に^{ささ}げられているか、神と人ともに喜んで仕えようとしているか、反省する必要があります。私たちがもし、教会の活動において、また職場にあって、家庭にあって、一つひとつの働きを喜びと感謝と賛美をもってすることができたら、どんなに幸いなことでしょう。私はそうありたいと願っています。働きに感謝が欠けると、労苦は苦痛となり、重荷となり、不平となり、無気力となって終わります。感謝ができる時、労苦は苦痛や重荷ではなくなり、楽しみとなり、活気に^{あふ}溢れてきます。神への感謝と賛美が人間にとってどんなに本質的なことであり、人間を死から生へと変えてゆくほどに それほどに大きな力と恵みに満ちたものであるということを、すなわち どんなに素晴らしいものであるかということ、毎日の実生活の中で経験してゆきたいものです。

それゆえ、私は詩人と共に祈るのであります。「わたしを生かして、あなたをほめたたえさせてください」と。